

令和4年度愛知県放課後児童支援員キャリアアップ研修レポート
研修テーマ(家庭における養育状況の理解)

【クラブ】つくしクラブ 【名前】西村 巧

今回もZoomにて参加。
画面を挟んでの参加者は実に170人オーバー。

今回は『家庭における養育状況の理解』ということだったが、内容はほとんど「虐待問題」に特化したものとなった。
講義の内容は資料に沿って虐待というものをもう少し詳しく説明していくものだった。
虐待には様々なものがありその種類には「ネグレクト、性的虐待、身体的虐待、心理的虐待…」その中で一番相談件数が多いのは心理的虐待、次いで身体的虐待。
そこで思ったのが最近の目新しいニュースでの「保育施設内での保育士による子どもへの虐待」。ニュースを見る限りではなるほど、心理的、身体に並び心理的なそれもあるように感じた。

現在では家庭内での虐待に限らず、保育施設でも隠れた虐待が行われている実態。

その中でふと自分、そして我施設を振り返ってみる。
指導員の先生方は皆優しくて元気で子どもに近しい存在で接してくれている。
自分も問題が起これば「叱る」「怒る」ではなくまず「話」をするようにしている。
学童期。何度言っても言うことは聞かないし、同じことを繰り返す。
その結果誰かが怪我をするかもしれない。
その結果誰かが傷つくかもしれない。
それを防ぐためにも「ヒヤリハット」を常に考え言葉がけをしたり、自己研鑽して自分を高めたり様々な努力をしている。
大事なものは「気づき」。
ちょっとした言動にも、気になる服装にも、気にならないような傷にも。
それを再認識するためにも今回の研修は有意義なものとなった。

ただ、怖いのはそこでナイーブになった保護者が保育施設や保育者の重箱をつつき始め全てを「虐待」に結び付けないか、だ。

集団生活の中、ルールがあり、前述したが誰かが怪我したり、傷ついたりする前に止めなければならない。
そういった時に多少大きな声が出たり、止めるために当事者の体を引き寄せたりすることは致し方ないことだし、支援をはき違えないように子どもたちとマンツーマンで話をする 것도大事だ。
しかしそういった事でも子どもから「大きな声を出された」「体を引っ張られた」「自分だけ怒られた」と言われ、そこだけピックアップされれば「虐待」に聞こえる。
だからこそ指導員(保育者)と保護者とのコミュニケーションが大事になってくる。
それをなくして子どもの声のみを鵜呑みにして指導員(保育者)を叩く保護者はこういった部類の「虐待」になるのだろうか？
それが怖くて、子どもたちから暴言を吐かれ、叩かれても、我慢をし、それを吐露した挙句、「それは施設のやり方がまずい」と言われたら？そして多少の事でも「虐待」だ、と責められるのならこの仕事のやりがいとはなんだ？とも思う。
ニュースにもなった保育士の言動は言語道断だとしても、今後は保育者を守るための方法もしっかり確立させてほしいと思った。
本題からはだいぶズレてしまったが、だからこそ保育者も保護者ももっと「虐待」について理解をしなくてはならない、と思った。